

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日郵務省特許認可（第三五二號）
昭和二十九年十二月二十五日印刷
昭和三十年一月一日發行

第二十一卷 一月號

淨土



正月號

國寶

右京權太夫隆信筆

法然上人御眞影





元旦午前五時、凍てつくような曉の暗を破つて、本堂からは厳かに大太鼓の音が鳴り響いてくる。喚鐘が鳴り讀經が始まる。聖徳太子一刀三禮の御作祕佛本尊が開帳される。阿彌陀經三卷、般若經五卷、念佛一會、終つて霜柱をサクサクと踏んで、墓地の歴代和尚の墓に詣でる頃には、夜もほのぼのと明けて、元旦の冷たい陽の光がさしてくる。これがこの寺の修正會である。一年行事は修正會に始まる。

元旦の祈願は、「天下和順にして日月清明なれ、風雨時を以てし災厲起らざれ、國豊かに民安んじて兵戈用うるなく、徳を崇め仁を興し務めて禮讓を修せん」というのである。平和への祈りであり憧れである。過去三十年、いや四十年、私はこの元旦の祈りを怠つたことがない。人と人とが互に貪りや憎しみや愚かさを捨て、心から助け合い愛し合い、豊かに生産し楽しく消費し、高い學術を誇り優れた藝術を競い合えるような社會の實現はいつのことであらうか。或る意味では世の中はよくなつていといえよう、階級の差別は次第に忘れられ人權の尊さが認められ、科學や技術の發達は目醒しく、日常の感覺的な生活は日増しに快適になる。けれどもその半面、世の中は日毎に險しくなつていくともいえよう、狭い島國に多くの人間がひしめき合つてゐるから、いきおい他を壓し他に先驅けねばならないことになる。今では戦争とか武器とかいう概念が十年前とは全く違つてきている。もし戦争が始まれば、今度は、敵を殺すだけでなく人類を皆殺しにする。

「人間に宗教は必要であるか」と誠しやかな問いを設ける者がある。むしろ「かつて宗教なしに暮した人類がどこにあつたか」と反問したい。出産に祈り、成人に祈り、結婚に祈り、病苦に祈り、船出に祈る、臨終に祈るのが人間である。絶對なるものへ祈りなくして、平和も幸福もないであらう。

元旦まず佛前に、「國豊民安、兵戈無用」と平和への祈りを捧げよう。(賢順)

淨土正月號目次

佛心童心……………吉田絃二郎(2)	眞淨土教の世界的進出… 椎尾辨匡(5)
對談 中共の宗教事情……………大谷光潤(8)	童話 作つた風……………内山憲尙(22)
法然上人最後の正月……………大橋俊雄(24)	史話 白隱禪師と山賊長四郎 藤田和彦(28)
念佛の聲するところ……………新保義道(25)	書 の 話……………林 錦洞(15)
かがやきの美……………上田理和(21)	誌 上 年 賀……………(32)
御忌法話……………須藤隆仙(17)	書 評……………(13)



佛 心 童 心

吉田 絃二郎

除夜の鐘の音も戦時中鐘が供出の憂き目に逢つてからほとんど聽かれなくなつた。さびしいことである。師走の夜空を寒々とひびいて、永劫に滅^くえてゆく除夜の鐘を聽けば、逝く年のあはれさ、人生のはかなさ、無常迅速の理がひしひしと胸を打つ。

除夜の鐘の音はどんな大説教にも増して人間の心を清淨にする。冬の夜空に餘韻^よ々たる除夜の鐘を聽けば、地に伏して歎^{なげ}歎したくさへなる。

すべてのものは流轉する。生あるものは死ぬ。

「死ぬことは生まれた刹那からきまつてゐる」といかにも淡々として悟つたやうなことをいふ人がある。しかし凡夫のわたくしたちにとつては死ぬことはこの上もなくさびしい。

人間は健康である間は死を恐れないと思つてゐる。しかし老いて、病む身になれば死といふものの寂しさが胸に迫つて来る。

自分の周囲の人たちから別れなければならぬことのさびしさはいふまでもなく、自分が朝夕暮

してゐる書齋、庭、木、石とさへ別れなければならぬことはさびしい。

除夜の鐘はこの凡夫の寂しい心に頼りどころを暗示してくれる。除夜の鐘の音を聴けばどんなにかたくなな心の人でも清浄な佛心に立ちかへるであらう。

除夜の鐘を聴いてゐる間だけは自分の汚れた心も澄んでゐる。一年にたゞ一度、ほんの一時間か二時間であるが、その間だけは罪業深い自分の心も救はれたやうな氣がする。

やがて除夜の鐘の音も夜の遠空に消えてしまふところになれば、若水を掬む釣瓶の音が新たに生まれて来る年の新たな生命の呼吸を感じさせる。

水道のない地方では今も若水を掬むといふ春の行事はいとなまれてゐるであらうが、都會ではたゞなつかしい思ひ出となつてしまつた。

元日の朝早く、まだ星がまたたいてゐるところ、あちこちの家々で若水を掬む釣瓶の音を聴けば子供心にも身の引きしまる氣がしたものである。

あのころはわたくしの故郷では時計を持つた家といつてはなく、夜半の三四時ところに鳴く鶏を一番鶏とせうと呼び、二番鶏、三番鶏まであつて、三番鶏で、夜明けの明星がまたいてゐた。

正月を迎へるころになれば鶏の初音、若水を汲む桔槔はねつるべの音がしみじみとよみがへつて来る。

除夜の心が清浄な佛心であるとすれば、元旦の心は永遠に美しい童心である。

人間は一年にたゞ一度でもいゝから清淨佛心に立ちかへり度い。それとおなじく無邪清淨な童心にかへり度いものである。そして正月こそ、その恵まれた機縁の日である。

北歐の或る作家の小説にこんな物語があつた。或る男が久しくシベリヤの雪の中に追放されてゐる間に或る言葉を忘れてしまつた。ところがたまたま故郷から訪ねて來た客人と話してゐる間に、客の口から^{みどり}緑といふ言葉が語られた。刹那にかれは「わたしが忘れてゐたのはその^{みどり}緑といふ言葉だつた。夜も晝も雪ばかりのシベリヤにゐる間に、わたしは^{みどり}緑といふ觀念も言葉も忘れてしまつた。今、^{みどり}緑といふ言葉を聞いたので、わたしの眼にはワルソウの郊外の青々とかゞやくライ麦の丘が映つて來た。」といつてかれは胸を躍らせてよろこぶのであつた。かれは眼に涙さへ浮かべてゐた。

ワルソウからシベリヤの雪の中へ追放された男のやうに、わたくしたちも平常は忘れてゐるものがある。それは童心である。

正月の朝まだき若水を掬む釣瓶の音も、わたくしたちの忘れてゐた童心をよびさます。

破魔弓、獨樂、風を店頭に見れば六十幾年前の童心にかへる。

梅もほころび、鶯の笛鳴きも聽かれる。萬歳の鼓の音も昔さながらにひびく。

老ひぬれど、藪の梅を見れば、笛鳴きを聽けば、巷の鼓の音を聞けばわが胸になほ童の心ありて涙ぐましい感じがする。



眞淨土教の世界的進出

増上寺法主
文學博士

椎尾 辨 匡

近百年の佛教は印度が頭を擡げて、英佛をはじめ歐米各國に注意されたのであるが、新しい眞仏教の發達を刺激したとは云へるが、未だその成立を見るには至らなかつた。

第二次戰の結果は、東亞の各國が新しい連絡を見出し、佛教に空前の新發達を促す事となつた。去る十二日にビルマに開かれた第三回佛教徒會議に各國十名以内の豫定であるのに、我國だけから、僧俗男女六十八名も日航機で、出かけたというだけでも、又それが本年以後の年々佛蹟參拜團の組織される事になるのでも空前の進出たる事がわかる。それに附帶して南北各々數百の學徒が、年々、佛教を介して交換せらるゝ事でも遠からず思想上に、大きく、眞佛教の新出を見る事が豫想せられる。

眞佛教というのは釋尊によつてひろげられた佛法の素直に世に弘まる事である。二千五百二十一年前に、ルンビニに誕生された御方が、人生が何とされたらいゝかといふ事を求めて眞人間の働きと考へられたのが佛法となつた。人間が外の生物とちがつて、知識考察の力が發達し、ことにインドの如き熱地では夜間靜かに考察するので、世界他人よりは、たゞ内心の考察にのみ重きが置かれて、自我觀念の發達となつたのに對して、釋尊は晝夜に通ずるものゝことに晝間の人間社會生活に眞實さを發見された。それは永遠の過去から未來への相續的發達であつて、個人々々の魂が、轉がりまわる六道輪廻の如き昔物語ではない。祖先は今の人々に生きる。今の人生が未來千萬年の後までも進

む。精進解脱の眞實生活は死なない。個人の命終と共に、その人が、消え去るべきものではない。山に坐禪し、河に服水する一人々々でも人生は群集社會でもあり、その眞實人生は和合社會の進歩である。即ち清淨界衆であり往生淨土の生活である事を發見された。従つて今の一息もこの永遠の大生活に生かされ、將來も無量壽國に生きていくものである。かゝる三世十方に通ずる眞實生活の中に何人も今生き、今往生し、永遠に無量壽國に生きる事を見出して三世十方に合掌し尊敬し、とくにその指導力たる過去未來の諸佛も現在佛とに合掌し、無量壽佛に歸命された。之が釋尊成佛の曙光であり、尊重供養であつた事を古い經典に誌しておる。いかなる經典も滅後除々に出來たもので、釋尊自身の筆録でもなく所見を語られるまゝにレコードしたものでもない。その後、初期經典に前述の如き説話が、誌され、更に、それは一乘道であつて、青白の法はいづれも、衆生の憂を除く、と説く所を見つゝ、無量壽經に光顏魏々たる釋尊を見つゝ阿難が、「佛、今過去未來三世のいかなる佛を念じ給えるか」とお尋ねした時、釋尊が、阿彌陀佛

を説き、一乘究竟の道にして四苦ある事なき極樂たる事を示されたる、新古全く同轍なるを見る。ページーや經集や現在南亞の佛教やを批判する時、釋尊の人間淨土往生の教と異なる事が發見され、シナ日本の淨土教とても、人間往生の淨土教の門前に、イんでおつて八德莊嚴の淨土に進みきらない感じがする。とくに法然上人が未來まで往生淨土の生々した道を示され、その晩年に及んでは自らにも日夜の生活に勢至菩薩等の還相を説かれたのみならず、上人御自身も幾十百年の後でも、念佛するものと共にいる事を進言せられたが、この法言一如となつて、一人一人の念佛の中に、息づき働く事が尊い事を信受して實現し莊嚴する事に努めずして、單に別天地未來の獨り住いでもあるかの如く、善導大師が、觀經蔓陀羅に「當彼華開聞妙法十地願行自然成」の禮讚文の如き畫面を畫かれた事のみを尊敬して、之を聞くは之を解行するためであり、刻々の奉仕作行が名利衣食のためでもなく有爲所得を離れて、米を作るものはその農事に、商いするものは人々の有無相通する事に教育するものは、學徒の發達にと、各々その仕事に、衆生

を成就し、佛國を高むる。南無阿彌陀佛たる事を喜び、南無阿彌陀佛する揮身の精進行が佛意に相應する故なる事を見るのが眞の佛教であり、釋尊が、最後にも、「世は無常なり汝等精進せよ」と遺言された教勅に適い、大經には、たとい身を諸々の苦毒の中に留むとも我行は精進するとの教意にも適い、ひとり社會人としての勤めや、經濟約束によるサラリー取りのためよりも正しい高い淨土莊嚴の尊き使命を遂行する眞佛教、眞淨土教が、各國人に認められる時が來たのである。

いうまでもなく、七年後には法然上人の七百五十回忌が來る、正味六年の歲月あるのみである。佛誕後二千五百二十一年の今年は、十五年目には成道からの二千五百年となる。昔から信仰の乏しい者は滅後年を経るに従つて墮落と法滅とを感じたが、信仰ある者の法悦奉行によつて、正法は益々榮え、彌々弘がつた。南無阿彌陀佛は、末法餘教悉く滅する後といえども、南無阿彌陀佛は留り流れる。いわんや近來をやとせられた上人の考からも、ことに過去の神話や小説や、想像を取り去つた眞實社會の人間生活の求め

られる今日、眞の信仰、宗教人生の現われんとする現代、この眞佛教・眞淨土教は、今年から、大に顯われる。

中村良觀君や井上秀圓尼がハワイに、野崎夫妻がロシアンゼルスに、國際佛教英語研究會が大正大學にと、英語淨土教の動きは僅かのようでも、去年までとは全く異つて全英語世界へ、生きた淨土教が、生々と進出する。歐米人には、一神教と違ふ阿彌陀教の眞相を得たいと熱中するもの多きも、原始佛教と縁切りのような彌陀說話や、チベット佛教などで知られておる神話的淨土觀のために、信仰に入りがたき事を嘆いておる人たちも、人間的業務精進の中に三世十方佛をまとめた南無阿彌陀佛の生活を心から受入れる事が出來た英語淨土教があらゆる國語の淨土教となつていく事も今年からであろうと思う時、如來一音演說法衆生隨類各得解と説かれた事も十方衆生乃至十念必得往生の願成の姿としての喜ぶべき事と感じて、新年と共に新しき念佛に新しき彌陀光を拜し、今日の任務行事にいそしみたいと存じます。

中共の宗教事情

對 談

參議院議員

大谷 光潤

評論家

戒能 通孝

本年の話題は何といつても中共との國交如何であらう。特に我々としては、佛教を傳えてくれた隣國に於ける宗教事情は最大の關心事であるが、現在までのニュースは、右とも左とも不確かな思いであつた。所が今回、入國された兩氏により生のものを聞く事が出來たことは何よりである。

宗教の自由はあるか

大谷 先生暫くでした。

戒能 本當に……

大谷 中國に旅行した時にはいろいろどうもお世話になりました。

戒能 こちらこそ、

大谷 われわれ日本文化學術視察團として安倍能成先生を團長として中國に渡つたわけですが、まあ新中國のいろいろな様相を如實に見せていただき、非常に私ども參考になつたのでありますが、ことに私は宗教界の

もんでありますので、北京その他上海、廣東などでは宗教方面の視察をさせていただいたのでありますが、北京では戒能先生と一緒に虚贊法師を訪ね廣濟寺にお参りしたようなわけで、非常に先生には宗教界でも御指導を得たわけですが、その時の御感想を一つ承りたいと思います。

戒能 私は佛教についてはあまり知識はございませんが、しかし中國の憲法草案が當時出ておつてその八十九條には人民の信教の自由はもとより信仰の自由は保障するといつておつて、マルクス主義と宗教の關係はどんな

もんだらうということが疑問でありました。ひよつとしたら信仰の自由を保障するといひながら反宗教運動もやつているのじやないかという感じをもちながら先生のおともをして廣濟寺に参つて見たのであります。ところが實際驚いたことには宗教の自由は完全に保證されているらしいのであります。ことに佛教の自由は完全に保障されているようでありました。先生の御感想は、

大谷 私も實は日本におりました時は、解放後ソ連と同じように佛教には相當迫害というか壓力が加えられたというようなことを聞

いておりますし、圓暎法師の如きはある意味において銃殺されたのではないかというよう

なデマも飛んでおつたのでありますが、實際今度行つて見まして、いろいろお話を承りま

すを見ると聞くとはえらい相異がございまして、いまおつしやつたようなあんばいであつ

て、信教の自由信仰の自由を許されているし、かつまた康濟寺をはじめ靜安寺にいた

しましても、その他のお寺にいたしましても相當國費を多大に支出して盛んに修理し

ているという實情を見まして、これは非常に宗教に對する政府の理解と申しますか、その

保護の力が相當加わつてゐるのだな、という

ような具合に感じたようなことでありまし

た。

戒能 そうでしやうね。人民代表會議で劍昌奇、當時の副主席が演説したのですが、そ

の中にこんなことがありました。われわれは宗教の自由を保障する、しかし宗教の外套を

まといつて帝國主義の手先になつたりするものはこれは保護しないといつておりました。こ

れはしかし決して宗教の自由と矛盾するものではないと彼は力説しておりました。先生の

先ほどのお話なんかもそれに關連するような點が少しはございせんか。

對宗教政策

大谷 確かに私もそう思いました。さつき

もいいましたように相當壓力が加わつたのではないかというように考えたのであり

ますが、やはり信仰はその自由を認められてゐるということは事實でありますし、圓暎法

師の如き安樂なる大往生をとげられたといふことも如實に話を聞き、非常にわれわれデマ

に迷わされたことを後悔いたしておつたやうなことであります。しかしながら私はこの寺

院などにおきまする修理が果して信仰を守るとか宗教を尊重するとか、そういう意味にお

いて政府が多大の費用をかけてそれを修理しているとはちよつと申上げかねる點があるの

ではないかと思ひます。それは申すまでもなく宗教は自由であります、しかしお寺など

のことを國が主體になつて修理するといふことは今日以前の何世紀かの勞働者が、かくの

如き文化財を造りあげてそして立派に今日まで保存されて來ておつたものを現在の勞働者

の時代になつて、そのお寺が壊れてしまつ

て、その文化財がなくなつてしまふといふこ

とがあつては誠に子孫に對して申譯けがない

といふこの勞働尊重の意味からしてわれわれの先輩のしたものを立派に残して行こうじや

ないかというやうな考えからお寺の修理が現在もつづけられてゐるやうに思ふのでありま

す。先生と一緒に参りました、杭州の西安寺の如きいまだ七回にわたつて政府の多大の費

用と人的勞働力を集結して現在やつてゐるのを實際に見て参つたのでありますが、一方に

は學校などの大建築をやりながら一方においてこの寺院の修理などをやるといふことは、

要するに私はその文化財の保護といふものに對して勞働力の尊重といふことがその原因になつてゐるのじやなかろうか、かやうに思ひ

ますが、先生はいかがですか。

戒能 私も實はその疑問をもつておりましたところへ、北京に中央民族の學校がある。これはチベット、ウイグル、回回とか少數民

族の人達を呼んで、専門學校、大學程度の學力を授けるといふ學校であります。學校の校長さんは費孝通といふ、英語の本を書いたこ

ともある人で、日本でもよく知られているこの費孝通さんの話を聞いているうちに私も多少感じが變つて來た。というのは費孝通さんの話では、これは國立の學校である、従つて宗教教育というものは全然していない、また宗教を否定しているわけではない、しかし少數民族の人々が集つて來た以上はそれぞれの信仰をもっているに違いない。彼らが信じているなら信じている宗教の禮拜に形式を與えないということではけしからんということになり、つまりラマ教を信じている人にはラマ教の禮拜室を、回回教を信じている人には回回教の禮拜室を與える、こういう風にして彼らの信仰に干渉しないということで、われわれは學校の中の寄宿舎に禮拜室を備えていゝるという話をされた。事實寄宿舎を案内してもらつたところの中に相當立派な禮拜室があるのでちよつと驚いたわけです。無宗教論者の政府首腦者で、しかも無宗教論者の政府首腦者が監督している學校の禮拜室があつてちよつと驚きました。もう一つは各民族が宗教によつて生活慣習が大分違ふようであります、ある人は宗教上の戒律があつて豚を食べ

ないとか、牛を食べないとか鶏を食べないとか、あるいは豚も牛も鶏も魚も食べないとかいう難しい條件があります。ところが中央學院でこしらえていゝるお料理はそれらの各種の宗教慣習に従つて食事を學生に與えていゝるという事實、こういう點からみますといゝうところも中國の政治家達はこんな風に考へていゝるのじやないかと思ひます。お寺はもちろん大事ですが、しかし宗教もまた人々が信じていゝる、信じていゝる以上信じていゝる宗教に對して満足を與へなければならぬ。従つて彼らがお寺が欲しいといゝうならやつぱりお寺をつくらなければならぬ、彼らがお寺を欲するといゝうのなら教典の出版も出來るようにしてやらなければならぬ、こゝういゝうに考へていゝるのじやないかと思ひます。しかしそれにも拘らず宗教の外套をまといゝつて反政府運動をやればそれは宗教心でない、宗教として人が信じていゝる間にはちつとも構わなないといゝうかなり襟度の大きいところを見せていゝるのじやないかといゝうような感じをもつていゝるわけでありまゝす。

大谷 私も少數民族の宗教を尊重するとい

う意味において現政府がとつていゝる宗教の自由といゝう點に對しては、いま先生のおつしやつたやうなことを感じたのでありまゝして、御承知の通り中國は非常に澤山少數民族がより集つておつて一つの國家をつくつていゝるものでありまゝして、まあはつきりした數字は私は存じませんが、三十余の少數民族がいゝるといゝうことでありますから、この少數民族は比較的文化が低い方々であります。そのためにそれを團結して行くには確に宗教といゝうものによつて團結力を強めて行つていゝるやうに私は考へまゝす。チベット、蒙古のことを考へても民族統治の上には相當宗教の力がよつて來たるものが大きいと思ひます。そゝういゝう意味からいゝうて、もしも宗教を彈壓するとか信仰の自由を奪うといゝうことになればソビエトの轍を踏むことになつて國家統治の上に大きな支障を來すといゝうことだけは私は事實だろゝうと思ひます。その意味においても信教の自由を許し、かつまた宗教に保護を與えていゝる先生と一緒に廣濟寺に參つた時も僧侶もお經も讀めずまたお布施をもらへないやうな人達にはある一定の最少額の補助金を政府か

らもらつていゝといふやうなことを聞いたのであります。そういうやうな點で、僧侶の生活にすら政府がある程度の保護を加えていゝといふやうなことは全く宗教を彈壓するどころでなく、ある程度の保護を加えていゝと申していいと思ふのであります。つきましてはこの少數民族のいまの民族學校のお話を承りますと、非常に細かく政府が氣をつけつつあるといふことを考えますと將來においては大同團結が完全に完成するのではないかと私は思ふのであります。なお次に先生にお話を聞いていただきたいと思つていゝのですが、この寺やとか教會堂に社會事業を盛んにさせていゝますが！

戒能 そうでしたね。

寺院と社會

大谷 先生も上海でご覽でしたか、

戒能 上海には行きませんが、北京で大部分學校になつたお寺があるのを聞きました。お尙さん自身が自分自身のお寺を學校にして校長さんになつたといふやうな話を大分聞きました。宗教もただ佛像とかお釋迦像を飾つてお参りに來いだけをいつておつたのではある意味で宗教は生きて來ない。従つて宗教自身

が社會において何かことをしなければならなといふ面ももつていゝのじやないかと思ひます。實際お寺を小學校にした人がそのやうに感じてやつていゝかどうか分りませんが、いまお寺といふ形だけで止めるのではなくして社會的な何かに寄與しようといふ氣持があるとすればやはり宗教といふものは進歩かも知れませんが、この點宗教家としての先生の

大谷 私は上海で靜安寺の密林法師に會いましたし、また玉佛寺で葦舩法師に會ひまして、この二人の方々の各お寺を訪問して參觀させてもらひましたが、靜安寺の如きは立派に小學校を經營していゝました。玉佛寺は盛んに診療所をやつていゝ、この診療所が甚だ面白いので部屋を二つに分けまして片一方は漢法の先生がゐる、片一方は西洋醫學の先生がやつていゝ。そして出てくる人達はどちらでもそれを選んで、自分は漢法でなほしてもらいたいといゝば診察してもらつて歸りに藥をもらつて歸るといふ具合にそこらは非常に醫療方面にその自由な選擇を與へまして、そして國民の健康保險あるいはまた環境衛生の上に大きな示唆を與へまた實行に移すことをお寺を通じてやつていゝといふやうな點に私は非常に面白く感じたのであります。その

ほか幼稚園をやつていゝとか、あるいはまた簡易圖書館をやつていゝとかいふやうなお寺も相當あつたやうに私は見て参りましたか、何れにしても社會事業といふものを、このお寺の空いていゝ部屋とかあるいはまた空いていゝ土地などにそれを設けましてそして宗教と社會生活を結びつけようといふ努力していゝることを見て参つて感じたのであります。實は密林や葦舩の兩法師に私は、日本はいま佛教の如きは老人の宗教で養老院のやうな考え方で宗教が取扱われていゝといふことを非常にわれわれは心配してゐるのだがこちらを見てもやはり相當老人の人の参拜が多いが、この人達に對して佛教としてはもつと若い人、この中國が國家建設にあの若人の數千萬の人が毛澤東主席に對して忠誠を誓ひ、そして盛んに建國の喜びを胸にふくらませて生産に従事する決心を固めていゝ時であるからして、これらの若人に對して宗教、ことに佛教はどういふ風に理解さすかについてのお考えを聞きたいといつたら、いや實はいまそれを考へていゝる最中だ、といふやうな話をしておりましたが、盧贊法師にも北京で會つたのですが先生もどうお考えになりますか。

宗教は今後どうなるか

戒能 私も中國の佛教はお坊さんが獨身主義を守っているのでお坊さんがいなくなるのじやないか、そのうちに佛教はなくなるのじやないかという質問をしたら、そんなことをいつても弟子がいるというていました、要するに新しい人があとをついで行くなら佛教も残つて行くようになります。しかしまた佛教も新しい弟子を獲得できなければ残らないということになる。なくなつてしまうと自然建物は歴史的記念物になり、建物を保護する、彫刻を保護するということになるのじやないか、宗教の問題にしてもやはり新しい人達がどんな風にして育つか、魅力があるかということが問題になるのじやないかと思います。

大谷 私も實はそういうふうに考えます。

上海などでどれくらい弟子がいるのかとお寺でそれを聞いてみたのです。大體二、三十人から七、八十人くらいの弟子をそれぞれもっている。それらが師匠について佛教の研究をやつていくという具合ですから後繼者は出てくると思いますが、信者におきましてなおどれだけの青年が佛教に關心をもつて進んで来るか。また求めてくるかということとはよほ

どこれは現在の法師どもが研究もし努力もして行かなければやはり日本と同じような老人の慰安所みたようになつてしまふのではないか。

戒能 それは事實宗教というものはそういうことになると思います。あるいはそれが一つの政治的なねらいかも知れませんが、少くとも現在のところは寺を、宗教を弾壓しようという傾向は私はなかつたと思います。結局信仰しない人が出てくれば仕様がないので、信仰するしないの問題は専ら人の自由に委せるといふ立場をとつて進んでいるようにわれわれは思います。

不自由？

大谷 多少不思議に感ずることはお寺に参つても、だれか通譯のほかには青年、いわゆる

工作人が出て来て仲介に立會う、あるいはまた新聞記事が官報のような具合であつて、一般社會の出來事を報じていないということ、あるいは國家分配というて學問をさせる上においてそれぞれの學生の希望をそのままに受け入れずして、それぞれの課目を割當、割當した大學生にはすべての費用を國家がもつということで勉強をさせるということです。西安

に行つた時にはまだ西安には相當の日本人がおつた。この間歸つた人に聞くと全部そういう人は山のビクニックに行つたり、われわれの行つてゐる間に會わせなかつたということもおかしなことです。中村靑衛門がわれわれに會つて話をする時はなぜか機關を通してくれ、そして立會のもとに話をするという、そういうようなことに對してもう一つは毛主席のように要人の居所、住いは公表されていないというようなことも一つはつきりどういうわけでこういうことが起つてゐるのか、というようなことがはつきりしませんがどうでしょう。

戒能 私は知りません、確かに新聞が面白くないのは事實なんです、ただ學生の問題は、學生はやつぱり希望によつて分けてゐるというていました。第一志望第二志望と第八志望まで書けるという話です。つまりどこでも定員があるのでそんなことになるのでこれは自然そうならざるを得ないことだと思いますその他の點についても私自身も調査不行届きです

大谷 まだいろいろお聞きしたいことがありますが、時間が來ましたので、こんなことで……。(本文はHNKより放送、本誌掲載はNHK、同高瀬廣居氏の御好意による)

索の跡を残して歩いておられる。

中村 元

著者と兩書

書

「東洋思想の歩み」

評

龜井勝一郎

「二十世紀日本の理想像」

著者

くんで横文字の佛教の方である。

龜井勝一郎氏は、文藝春秋の似顔畫でも、

中村博士は、佛教原典の研究、インド思想の探究、精細なる考證と思辨とより出發せられ、その學域は次第に東洋全般に及び、西洋

珠數を持たされる程、佛教に深い關心をもつ評論家であるが、前者と異り、二十才頃からマルキシズムを通過し、漸次、「人間教育」、古寺巡りから、佛經に親しみ、「信仰の無償性」の發表となり、「聖德太子」となつた。理想的人間像を求めて遍歴の旅を續けてこられたのである。「靜かなる思索家」であるが、

述べた理想像探究の過程を、前六章に於て、從斷して説いてある。かくして、現在の氏の巡禮の杖先は、本書第七章、東洋への回歸の所であるように思われる。

「東洋」という意味

ものを追究せられ、之に於ては前人未踏の實證の道を進まれている。漠然とした「東洋的な考え方」というものは誰しも感ずる事であるが、之を豊富な事實、正確なキャッチで開明されていく點は他の追隨を許さない。その學風は、漢文の佛教に對し、むしろ原典をふ

又、生々しい社會非慘事には嚴しい攻撃をものされるような情熱を有し、身もだえをしつゝ何ものかを、ひたぶるに求めていく尊い模

さて、中村氏の方で、外國事情の紹介を除くと、「東洋思想への視角」、「東洋思想の未來性」の前二章である。兩者共に東洋の持つあるなにかを説かんとするのであるが、この「東洋」という事について、中村氏は、東洋と西

洋という二つの類型を立てて對立させる事は危険で、兩者をさらに分解して考えるべきである(22頁)とされ、龜井氏も、東洋對西洋の對立、たとえば東洋は精神、西洋は物質といった稚態から脱却すべきだという(201頁)。

今日、西洋に於て東洋の心を欲することは注目すべきであるが、そうだからといって、東洋が東洋獨自を誇る事は無意味で、そうする事はやがて自らの殻を閉すものである。兩洋の別をのみ考えず、虚心に、その世界人心の上に光輝を放つてゐるものを取り出し求めべきである。此點を云つてゐると思われ

東洋の叡智

では、そういった現代世思想に對して兩著はどう答えているか。

中村氏は、我思う故に我ありという各個人を抽象的孤立的な單子として考える個人主義に對して、古代東洋の叡智は極めて教えるところが多いものであつて、緣起の考方、自他不二の思想、社會連帶性の意識による共感の精神は、今後大きな意味をもち、微々たる日

本が今後世界史的意義をにない得る可能性ありとせば、まさにかゝる方向に徹することだとさえ言われる。(第二章第四節)

龜井氏によつても、之は東洋的無限定の叡智であり、右とか左とかの二者選一による二つの世界というものはなく、又その中間とか第三勢力もなく、すべて固定化を去つて、活動する生そのものの無限定の裡に求められる。之はガンジーの他も活かし、自己を否定する博愛である。矛盾は事物發展の一切の過程中にありとする「矛盾論」の毛澤東とも一致するものであるという。この東洋的無限定の叡智そのものこそ、氏の理想像である。

龜井氏が、天心の東洋は一なりという考方から、何か一なるものがあるにちがいないとして、ここまで來られたのと、中村氏が、東洋の原典を徒渉して、その結論として、ここに達せられたのでは方法は異り、又、前者が觀念的で今後の序説的なものであるに對して、後者が、一々、實證し、具體的に説明があるのでは差はあつても、この共通性を持つ事は面白く感ぜられる。

龜井氏のは、あくまで理想像であつて、そ

ういう東洋的人間の可能性を論じてゐるからそれが抽象的で、一寸讀みづらい所があるが氏の論の目的、それへの過程に於ける論評とを連關させながら讀むと、了解しやすく思われる。

中村氏の第三章以下では、インドより發する平和思想として、その平和的性格、佛教、チャイナ教、アショカ王、近代インド思想、第一、第二大戰に對する平和論をあげ、第四章では、アメリカに行われているインドの宗教の實態の紹介、第五章では現インドに萌する注目すべき諸運動が紹介されてある。

以上要點だけを述べたが、兩著は、ぼんやりと自己の傳統佛教の井戸の中だけを見てゐるものに對しても、警醒の鐘であり、思想の窓を開いてくれる。兩著を比較しながら讀めば、又、趣き深いものが存しよう。

○「東洋思想の歩み」(要書房、昭和二十九年、一九〇圓)

○「二十世紀日本の理想像」(中央公論社、昭和二十九年、一二〇圓)

書 の 話

林 錦 洞

茲に昭和三十年乙未の新春を迎えまして皆様の御清榮を御慶び申し上げます。

終戦から十年目を迎えて、此頃は色々の面で落着きを取り戻し私達の本當の生活の在り方に付きよく考えられるようになりました。此の事は復古調などと呼ばれて往時の軍國的・封建的な行き方と混同されて居る様ですが、日本人がその國本來特有の良さを守り育て、行く事は悪い筈のものではありません。寧ろ逆に三國人に依つて其の良さを再認識されられる事が屢々あるようです。今年こそは本當に獨立國として日本人らしい生き方を考え且つ實行して行かね

ばならないと思ひます。

さて書の話ですが、書道も最近は復古調の波に乗つたものゝ一つでせう。占領政策時代は「書は姓名を書すれば足る」と言つた調子で、當局自體が無關心でした。學校習字は頗れ、漢字は整理制限され初めました。本來必要があつて作つた文字を制限するのですから無理があります。間もなく何この字に限つて使用してもよい等と誠に可笑しい事をやり出しました。兒童の書寫能力も低下し、勢ひ町の書塾等に父兄の方から子供を通はせる様な事になりました。偶々日本書道連盟（社團法人・會長吉田茂氏・

理事長藝術院會員豐道春海氏）の習字教育復活の請願が議會を通り時を同じくして日展（舊帝展）に第五科として參加する様になり、逐時書道熱は高まつて行つた様です。又戦後の思想的な解放・人間の自覺・個人の尊嚴と言ふ考え方が諸般の面に影響して行きました。生花や書道等の新しい表現方法を生み出したのです。丁度繪の方でもピカソやマチス等の畫風の流行と相俟つて、前衛書道と呼ばれるものが起つて來ました。前衛書道の良し悪しは別として、東洋の書と言ふものが米國やフランス等の美術界に大きな關心を持たれる要因を作り、こうした色々な條件が重なり合つて、書道は人心の安定と共に東洋美術の粹として再認識されて益々興隆の一途を辿つて居ります。

然し單に復活した、盛んになつたでは何にもなりません、本當の書藝術として完成させ後代に残すのは此からだと思ひます。從來考えられた書はお手習であつて、何とか見られる程度にとか、お行儀がよくなる

精神修養だ等と言はれ、實用的乃至訓育的な面が強かつた様です。此は此として必要な事ですが、此丈では二十世紀の書としてその價值を認識させまた發展させる事は困難な事と思ひます。書は「文字を素材とした墨による線の藝術」と考えられてよいと思ひます。最も單純に力強くそして美しく表現されて行く書の世界は、東洋的なものとして俳句や茶道等々と同様に西歐人の讚歎的となりチャームなものとなつて來てます。文字の示す意味は解らぬけれども墨線による黒と紙の白さによる空間との對象の面白さき、びしく逞しい線、豊かなのびのびとした線、様々な表現私達の夢を樂しませ實現さしてくれまます。そこで書に於ては形や線、力等が重要な構成要素となる譯ですが昔から「書は心畫なり」「心正しければ筆正し」と言はれたり又「人、書俱に老ゆ」の如く人格が完成されて行くものであると言はれ、書作家自身の生活の表現精神の具象こそ本當の書藝術であると思ひます。昔の禪僧の墨蹟等を見て居ますと、自

ら其處に滲み出て居る風格を感じる事が出來ます。此の事が書の第一義でなければならぬと思ひます。

たゆまざる生成發展の相、生き進み、動く事が縁起の相と觀する時、其の動きを書の世界に於て一管の筆に托して表現する事もその人なりの生活を表現した立派な書藝術であり、身は罪惡深重の凡夫と反省懺悔し日々精進して人間の善意を信ずるものにとつて、人間性の自覺を書の世界に書作して行く事も作家としての生き方であると言へませう。佛教的世界觀を裏付けとした書作活動こそ私達の理想でもある譯です。宗教々育との關連に於ても、青少年を対象として書道する時、私は必ず其の前後に御本尊への禮拜（割笏によつて無言三拜）を行ひますが、子供達は最初は恥しそうに手を合はしてますが回を重ねる毎に黙つて合掌禮拜し、此は其の儘日常生活に繋がつて何時何處でも自然に合掌をする様になつて行きます。

新年には書初を行ふ事が行事の一となつ

てますが私が増上寺や自坊で行ふ書初式を紹介しておきますと左の次第になります。

喚鐘、着座、若水奉獻（女子）獻香（男子）無言三拜、香燭、三寶禮、三奉請、歎佛偈、開經偈、般若心經、表白文、代表試筆、試筆奉獻（會員一同）誓詞捧讀、祝聖文（天下和順）十念、無言三拜、退堂。

以上の次第で何か參考までにして頂ければ幸いです。（書家・貞林寺住職）

口畫寫眞の説明

勅修御傳卷第十にいうが如く、法然上人は、御白河法皇に一乘圓戒をさづけられたが、法皇御信仰のあまり、右京太夫隆信朝臣におほせて、上人の眞影を畫かしめられたのが、此御影であります。絹本着色、紫地印金色金闌表具、竪一尺五寸横九寸四分で、畫調が沈んだ墨色で統一されてあるので、寫眞版としてはうまく出ないのですが、一度は本誌に紹介したく敢て、正月御忌（廿五日上人西化）を機として掲げました。原本は知恩院にあります。

血みごろの生活



須藤 隆 仙

いけらば念佛の功つもり、死なば浄土へまいりなん。と
てもかくても此の身には、思いわづろう事ぞなきと思ひ
ぬれば、死生共にわづらいなし。

若い私はこの御言葉がすきですきでなりません。すきだと申しま
すと誠に失禮のようでありますが、とにかく正直に申しまして元祖
様の御法話の中で此の御言葉が一番すきなのでございます。

多分去年だつたと思いますが、私はあるお寺へ説教を頼まれまし
た。其れが丁度御忌の説教であります。話の終りに私が「いけらば
念佛の功つもり」と聲高らかにこの御法語を讀み上げますと參詣
の方々が一せいに「南ムアマミダブ」「南ムアマミダブ」とお念佛を唱
えて下さいました。私は嬉しくて嬉しくて本當に何といつて良いの
か言ひ表す事の出来ぬ程の嬉しさを胸に抱いてお説教の壇を降りた
のであります。

(17)

所がそれから二ヶ月程して今度は別のあるお寺で近所の坊さんと
一諸に話をする機會を得たのであります。その時私はある坊さんか

ら意外な質問を受けたのであります。というのはその相手の坊さん
がいうには「お前はまだ年も若いくせに、生けらば念佛の功つもり
死なば浄土へまいりなん、などという御法語を讀んで婆さん方に念
佛を唱えさせて、一體お前自身の心の中からいつているのかね、多
分心にも無い事をいつてゐるのではないか」というのであります。
これには私も啞然としてしまいました。何といつて答へたら良いか
其の質問があまりにも意外だつたので私は唯「私の性質として心に
も無い事を口にする事は出来ませぬから」と一言いつた丈でした。

それから私は幾度もお寺の法要だとかお在家のお通夜だとかに説
教をたのまれましたが、其の度に此の御法語を讀むのがもつたいな
い様な氣がして、切角自分ではすきですきでしようがない御文なの
になる可く讀まない様にしてゐるのであります。其れは何故かと申
しますとこの御文を拜讀して、御聴聞の方の中にはあの坊さんがい
つた様な疑いを抱いて聞いてゐる人が居やしないかと思つと、非常
にいやな氣持がして、御文に對しても、もつたいたないし、又疑念を
抱いた人には其れ丈罪をつくらせる事にもなるので、なる可く讀ま

ない様にしているであります。

今日、元祖法然上人の御忌法要に當りまして、皆様にお話を申し上げさせて頂くのでありますが、私は今迄のこの様な法然上人の御法語に對する私自身の出來事から、非常に考えさせられるものがありますので今日は一つの法然上人が此の迷える私達にのこして下さいましたみ教えの中で特に人間として生きる道という事に關しましてお話をさせて頂きたいと思うのであります。

どうして此處に特に「人間として生きる道」といつた様な話の中心をもうけたかというときき程申しました上人の御法語の事で、特に深く深く上人の教え給うた人間としての生きる道について考えさせられるものがあつたからであります。

其れは其のある坊さんが「お前は年も若いくせに心から淨土を願つてゐるのか」と私に聞いた事から始まるのであります。

一體法然上人が教えられました人間生活の指針と申しますか、即ち生きて行く道は誠にはつきりしてゐるのであります。

それは生きて行く上に大切な三つの心構えとして説き明かされております。

其の第一は眞實をもつて生きるという事であります。これは詳しく至誠心（しじようしん）と呼ばれるのでありますが、口も心も、行いも心も、皆まこととなつて、うそ、いつわりの無い生活であります。内外相應の心とも申すのでありますが、總べての事に眞實である、まことである、本當であるという事です。

お念佛も誠の心で唱える、決してうそ、いつわりの心をもつてお

念佛を唱えない、これが生き行く上の心構えの第一であります。

社會を見ますと中々この様な方々はおられません。いや／＼社會の人などと人事ではありませぬ。この私です。この私が、誠にうそといつわりの中に生活してゐるのです。だから私達はもつと／＼この事について努力せねばなりません。私はこの事について、いつても上人様の御前にぬかずいた時、これ丈は立派に守つておりますと心に誓える人間になりたいと思ひ、心から其れを祈り又出來得る限り努力しております。だが仲々それが出來ません。残念です。本當に残念です。だがこうして皆様の前でお念佛の話をさせて頂く時この時丈は絶対にうそをいゝません。いつわりも申しません。心に思ひまゝを話してゐるのです。其れなのにある坊さんに、お前の云つてゐる事は本當の事かと云われたので、私は全く愕然としたのでした。でもまあ此の事は佛様丈が御存知でありましよう。

次に生き行く上の第二の心構へは反省という事です。良く色々の事をふり返つてみる、反省してみる、これは詳しくは深心（じんしん）という中の信機（しんき）という事になるのでありますが、良く良く反省してみますと始めて人間は今迄の自分の過ちや罪惡に氣づくものであります。

そして自分が罪人であると始めて氣がついた時、この時こそ人間に最も尊いものがみつけれ出された第一瞬間なのであります。

實を申しますと淨土宗におましては「反省」のない人は念佛を稱へる資格の無い人と云つても過言ではないのです。それはどうかといふと、淨土宗の教えは自分自身が罪人で、しかもか弱い虫け

らの様な人間で、とても自分一人の力では尊い人間としての最高の生きがいをつける事が出来ないという人が、始めて佛様の慈悲にすがつて、佛様のお助けにより、其の様な生きがいの中に生かされてもらおうというのでありまして、随つて其れには何といつても反省という自分を見きわけける準備作用がなければ、佛様におすがりする氣も、お助け頂く氣も起るものではありません。

ですから三つの心構えの中では反省という事が非常に大切な心構えなのであります。

この世の中を過すにも、やはり反省という事が一番中心になつてゐるようです。われわれが世の中を立派に過すには、やはり倫理とか道徳とかいう人としての道が大切であります。この倫理とかいう人の道にありましては、良心という事が非常にやかましくいわれます。倫理學などといつて人としての道を學的に取りあつかうものの中でも特に良心論といつて、良心は人間の行爲や品性を左右するものであるからというので非常に重要なものとして研究されたり説明されたりしているのであります。ところが其の結果をみますと此の良心という事は結局「反省」という一語につくされてゐるのであります。學問の上でも色々云われますが、色々な説を總合して、畢竟心というものには良心とか悪心とかいう色々のかたまりが集つて出来てゐるのではない。心というものは丁度水が四角い器に入れられれば四角くなり、丸い器に入れられれば丸くなるように、良い方面に働けば良心となり、悪い方面に働けば悪心となる、即ち働く面によつて良惡の區別がつくとされてゐるのであります。したがつて、

常に「反省」して、あゝあそこが悪かつた此處が悪かつたと氣をつけてゐる人は、いつでも心を良い方に働かせてゐる人、即ちいつでも良心をもつてゐる人となるわけであります。

ですから人間この反省という事を忘れなかつたら、常に良心をもち、良い心で世の中に立つて行けるといふものであります。

ですから「私達は凡夫だ、馬鹿だ、罪人だ」といつていても、決して「凡夫の方がいい、馬鹿の方がいい、罪人の方がいい」といふのではなく、實はその様な凡夫だ、罪人だ、馬鹿だと眺めてゐるまゝ一人の私は、聖者で、賢者で、善良者であるわけです。こゝの所を良くわきまえておくと本當の法然上人のみ教えの尊さがわかるのです。

次に第三の心構えは「親切」といふことであります。これは云いかえれば「他人の事も自分と同様に可愛いがつてやる」といふ事で詳しくいうと願往生心(がんおうじょうしん)といつて往生を願ふ心)の中で願共諸衆生(がんぐしよじやう)といつて、自分一人だけでなく、世の中の總ての人が淨き世界、尊き世界へと歩みましようといふ共に救われようとする氣持)といふ言葉であらわされるのであります。

この頃は大部ものの考え方が利己的になつてきました。自分丈良ければ人はどうでもよい。「正直ものは馬馬を見る」人をだましてでも良いから自分がとくをしよう、こう云う考えの人が随分ふえてきました。これもやはり人ごとでは無い私自身がそうなのです。

そこでこんな利己的な考え方が良いか悪いか位は今さういふ迄も

ない三才の子供でもわかつているでしょうが。

浄土宗では一人丈という利己主義を教えません、衆生と共に、皆さんと共に。ここに法然上人の開かれた浄土宗の人間愛の尊さがあるのです。

キリスト教でも隣人愛という事を申します。要は親切の事であり、ますが、とにかく自分も親切にして上げて、人からも又親切にしてもらいたいものであります。

親切という事に關しまして、實は今年のお正月に非常に感激した事があるのです。

私事で恐縮ですが、實は正月の八日に私の所へ秋田縣の林さんという七十五になるお爺さんから手紙が來ました。見ると「ブラジルのサントスという所にいる息子からパウリスタ新聞という向うの邦字新聞が送つて來たが、それに、あんたの事が出ているので、其の事を知らせます」というのです。事件の内容は、私の調べている一寸した古い書類に關しての事なのですが、私は全く感泣してしまいました。まだ一度もお目にかかった事のない七十五のお爺さん、わざわざ老いの手で筆をもつて私にこの手紙を書いてくれたかと思うと、有難いといつて良いのか、もつたいたいといつて良いのか全くという言葉を知りませんでした。

特に正月早々の出來事なので私は、はあ今年の一つ親切という事をモットーとして過さねばならないと肝に銘じたのであります。

あるいは又普段親切という事に缺けている私に對して「親切をしなさいよ」というこのお爺さんが佛様のようにも思われました。吹聴の様ですが深く心にきざみ込まれた事でしたので申し上げます。

まあ、下手な説明でありましたが、この様に三つの心構え、即ち

「まこと」ということ、「反省」ということ、「親切」ということ。この三つが法然上人によつて、人として生き行く道の心構えとして教えられているのであります。

こう一口に云えば簡単の様であります。

だが皆さん、いざこれを實行するといつたら並たいていではありません。もうこれには文字通り血みどろの努力が伴わねばなりません。なまはんちやくな事では出來ません。

法然上人は實際に此の「まこと」と「反省」と「親切」とに徹底されたお方でありました。

血みどろの人世をおあるきになられたのであります。

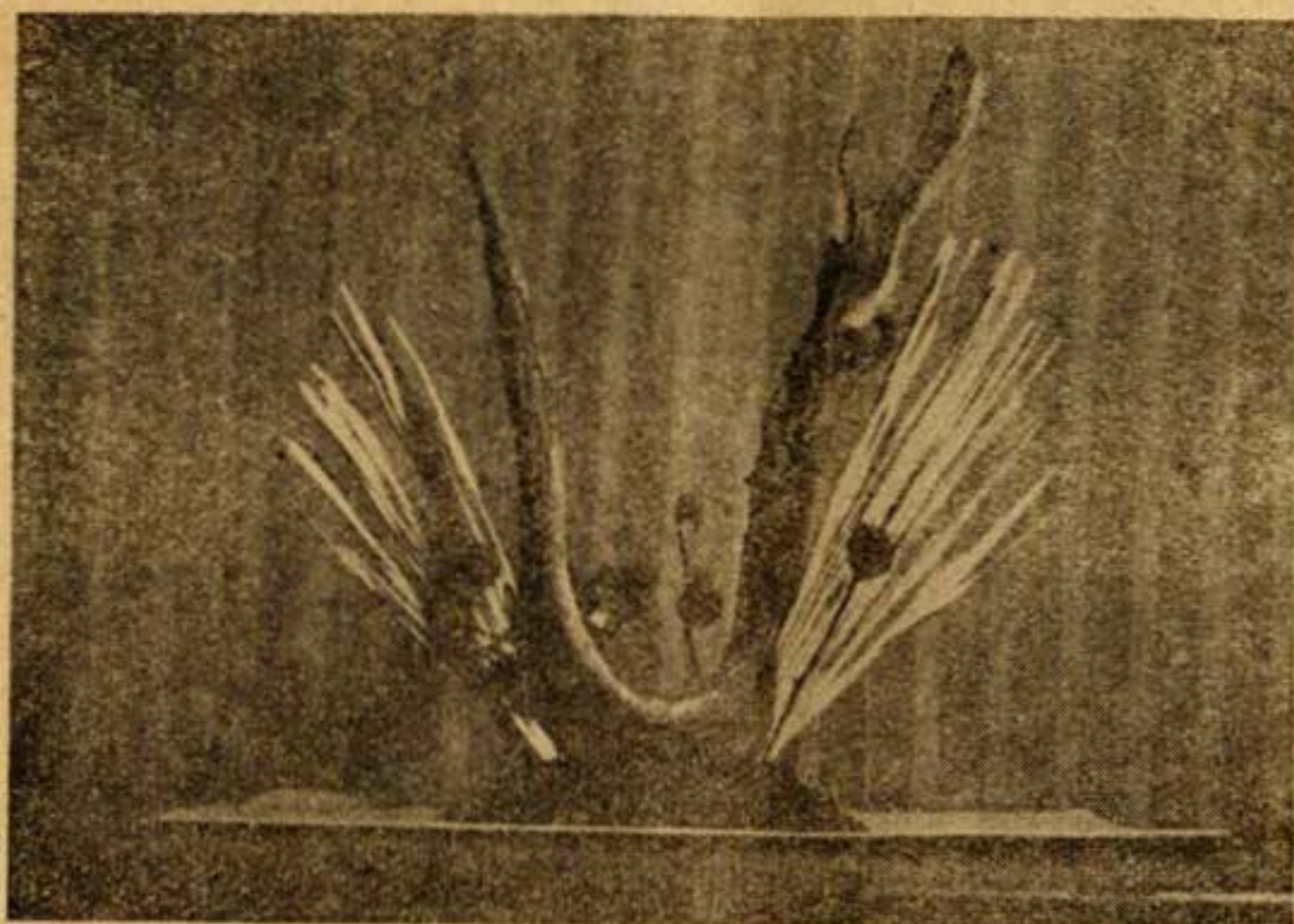
去年私の所へアメリカのフロリダという所の大學の先生で、ジョウジ・レンセンという方が見えしました。本堂へ案内して色々説明をし、法然上人の御像の前に行つて「これが浄土宗を開いた法然上人です」というと、「ああ」と驚歎の聲をもらしてから「英語で書かれた法然上人の御本を読みましたので、上人を尊敬しております」といゝました。そして是非、寫眞を撮りたいといつて「寫眞をとつてもよいか」と私にきくのです。

私はこの時、胸のふさがる思いでした。うれしくて、うれしくて外人から迄尊敬されてる法然様、この様な方のみ教えにあづかる私はなんと幸福かと目がしらをあつくしたものです。

皆様、この法然上人様のあとへ續きましよう。血みどろの道をあるきましよう。「まこと」「反省」「親切」この三つを忘れず血みどろの道のあるきましよう。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、この道こそ、南無阿彌陀佛への道なのであります。合掌……十念

(函館・稱名寺執事)



かじやきの美 (古流現代華)

制作 上田理和 (古流顧問)

花村 松の古木、棕櫚、ピンクのカーネーション、

曼陀羅華(ちようせんあさがお、俗名きちがひなすび)

形態 シンメトリー (左右相稱花)

遠く深く根ざした永遠のいのちから、若きいのちの希望にか
じやくお正月です。それは厳肅な莊重の美の世界です。藝術に
おいて莊重の感じはシンメトリーの形態でせう。法隆寺の金堂
その本尊様など、そのよい例のようです。

松の古木は永遠のいのちの幹です。それに沿つて眞白にさら
された棕櫚の葉が希望の光として無限の世界へ擴がります。

寫眞では色彩感覚が傳わらなくて物足りませんが、焦點にピ
ンクのカーネーション二輪、愛と平和を祈るように希望の道を
暗示するのです。(カーネーションは水切りして、小さな器で
劍山を使えば簡単です) 曼陀羅華のビッチビッチ光る針の放射
がバランスをとつて現實の何物かを感じて居るのです。

花器を使わないで、黒く光る眞砂で根本を埋めたのは、大地
につゞくいのちの象徴です。

風

た

つ

作

内 山 憲 尙

太郎君は、としのくれに立派な風をお父さんに買つて貰いました——疊半分位もある大きなもので、牛若丸が扇子をひろげてとびあがつている下に辨慶がなぎなたをふりかざしている繪です。美しく朱ぬりの五條橋のらんかんも右の端からのぞいています。

達雄君の家はお母さんが病氣でなが／＼寝ているし、小さいおうちですから、お父さんに立派な風を買つてくれなど言えないことを知っています。

達雄君は風がほしくてたまりませんので、暮になつてから、裏の竹藪から竹をとつて来て、風を自分で作ることにしました。夕方歸つて來られたお父さんが、

「達雄、何をこしらえているんだい」

「風ですよ……」

「そうか、明日はお父さんも休みだから手傳つてあげよう」といゝました。

翌日はお父さんと二人で風作りです。

「そら、お前はこの紙に繪をかくんだ」

「何がいゝかな」

「なんでもいゝよ、風には武者繪といつて勇ましいものをかくものだよ」

「向うの太郎君の買つて貰つた大きな風は牛若丸と辨慶が書いてありましたよ」

「龍なんかどうだい」

「龍なんか難かしいや……富士に日の出はどうですか」

「そうだね、富士に日の出か——よかろう」

達雄は富士に日の出の繪を描き始めました。お父さんは竹をけすつています。

「お父さんは、風作りが上手なんだよ、この竹は最少し細い方がいゝな……糸の張り工合が難かしいんだ。糸といえはお前のお祖母さんが、自分でつむいだ昔の糸があ

つたつけ、あれは丈夫でいゝよ、あれをつけてあげよう
達雄君とお父さんとで作った風がやつと夜になつて出
來ました。

×

風の強いお正月です。

ヒュー、ヒューとひどい風がふいています。

達雄君はうれしくてたまりません、自分の作った風を
持つて裏の原場へ出かけました。もう四五人の友達が風
をあげて居ります。

「お早よう」

「お早よう」

「太郎君早いね」

「あゝ、僕が一番早かつたんだよ——どうだい僕の風高
いだろう」

太郎の牛若丸の風は随分高くあがつています。外の風
をしり目にかけて、高い空に飛ばつてあがつています。

達雄君もあげ出しました。勿論達雄君の風は、太郎君
の風の半分もあります。

達雄君の風は調子よく、するするとあがり始めました
外の友達は

「君の風かつこうが悪いね」

「しかし、割方あがるじやないか」

など言い乍ら見えています。達雄君はだまつてニコニコ
しながら糸をぐんぐんのばしています。

富士山に眞赤な日の丸の風はぐんぐんあがります。と
うとう牛若丸に近づきました。

今では牛若丸と富士に日の出が一番上です。

風は、だんだんひどくなり始めました。

くるくるくると、一つの風が落ちました。又一つくる
くるまわつて落ちました。

三つ落ち四つ落ち——あとに残つたのは牛若丸と日の
出だけです。

「すごいな——」

「どつちが勝つか……」

子供たちは、残つた二つの風をながめています。

そのうち、ひどい風が、ピューとふいたと思うと牛若
丸がきらきらとまわつてさつと落ちました。

「日の丸が勝つたよ」

「達雄君すごいな……」

友達の聲が耳に入っているのか入らないのか、達雄君
はなんにも言わず、大空に高くあがつている自分の風を
じつと見えています。

心の中で「お父さんありがとう」と呼びながら。

(駒澤大講師、東京高等保育學校長)

法然上人

最後の正月

大橋俊雄

承元元年の年もおしつまつた師走の八日、最勝四天王院供養の大赦によつて元祖は流罪を許された。配所の日をながめたのは僅か九ヶ月にも満たなかつたが、そして邊陲の地に赴いて田夫野人に念佛を勧めることを朝恩とも言い、樂しみとしていた上人ではあつたが老齡既に七十五才になん／＼としていたお身ではさぞかし強く身にこたえた事であつたらう。兼實や光親等公達の運動があつたとはいふものゝ勅免の早さに驚き、配所の人々は別れを惜しみ、都に残つた門弟達は再會の喜びに心おどり、悲喜こも／＼の心情ではあつたが、念佛門に入つた老若男女の群れに送られて配所を出られたのは其れから間もなくの事であつた。しかし都の出入だけは中々許され

なかつたので、攝津國勝尾寺に暫く住むことにした。年月の立つのは早いもので、此處での假住いも早や四年、建暦元年の秋になつても入洛の宣旨は出されず、それが十一月の十七日になつてようやく宣下がさがり、再び都の土を踏むことのできたのは廿日のこと、人々は隨喜の涙を流して喜んだのであつた。

都に入つてからの元祖は、曾つての檀越關白兼實公の弟君慈鎮和尚の計らいで、大谷の禪房に住いすることになつた。大谷の清流は汲めども汲めどもつきない。念佛の興行は元祖を迎えて急に活潑となつてきた。一時灯の消えたような京の町にも光明がさしこんで來て、それからというものは法を尋ねんとして、元祖のもとに集まる者はあとをたゞず、入洛最初の供養の如き一夜のうちに一千人もあつたということである。

あわただしき中にも、建暦元年の年を送つてあらたまの年を迎えた。歸洛の喜びを外にただひたすらに念佛をすゝむる元祖も、有爲轉變の有漏の姿を十分に理解されてはいたものの、あれやこれやの輻輳した事情に、少なからず心を痛め、ふとしたことで年のおしつ

まる頃から病を得、病床の人となつてしまつた。寄せくる年波、萎び行く身の上に入入輪をかけて心痛がはげしくなつた所爲もあつたのであろうか。年頭の賀もそこ／＼に、二日には最早や食事も進まず、耳も遠くなり、病は日に日に抗進するかに見えて來た。七草小正月をすぎるに従つて、集る弟子達も次第にましてきた。病勢は愈々募つてきたらしい。それも纏て革り目も耳も昔日とかわらぬ程に、はつきりとよみがえつてきたので、側近にはべる人には愁眉をひらき、又不思議な思いにひたつたのであつたが、それは丁度灯心がまさに消えんとする直前に、一瞬バツト消えがけの光を放つようなもので、往生の前奏曲にしかすぎなかつた。全快はおろか病は厚くなる一方、でも高聲念佛はたゆみなく續けられ、みとれる弟子達には醇々として往生の事を談じていた。極樂の莊嚴、來迎の相を見てからは愈々往生の期の近きを知り、源智の請にこたえて一枚起請文を授け、病床に正月を送つた元祖は、その二十五日安然と弟子達の助言する中に、安養の淨土へと旅立たれた。

念佛の聲するところ



新 保 義 道

法然上人御年八十才を迎えられた建暦二年の正月、誰の目にも御往生の間近いことが察せられた。日本に於ける宗教改革の先驅者として、當時隨落せる舊佛教に對し、選擇本願の旗じるしを高く掲げて淨土開宗を宣言し、自ら念佛相續をことゝし他には稱名を勧め、三帝の戒師と仰れ當代の一大學匠として崇敬せられた法然上人が、唯一介の念佛者として念佛以外には何ものをも遣し給わずして、その波瀾多き御生涯を終らんとせられた時のことである。

朝夕比叡の峰を眺め、天台宗の開祖傳教大師の遺跡をまのあたり目にせる法然上人の弟子達にとつて、念佛門の元祖、淨土宗の開祖と仰ぐ「我が師法然上人」の御遺跡とすべきところの無いことは如何ばかり心細いことであり、物たりなかつたことであつたろう。

天臺の傳教大師には比叡延暦寺があり、眞言の弘法大師には高野山金剛峯宗がある。法然上人にも之に勝るとも劣ることなき立派な御遺跡をほしいのは弟子としてもつともな心情であつた。今や此の世を去り給う上人としてはどうあらうと、遺跡を定めずして往生されることは諦めようとしても諦め切れぬのは弟子、信者である。その一同の氣持を代表さ

れたのが上人門弟中の高足法蓮房信空（上人比叡下山に隨從、以來上人に仕えた人）である。信空は法然上人に向い

「古より一宗を開かれたお祖師様には必ず遺跡と言うものがありますが、御師匠様は御遺跡とするような山は勿論、一ヶ寺の寺も御建立になつて居られませぬ、御師匠様亡き後私達弟子、信者の者は何處を御遺跡として、私達の心の據りどころとし、又御師匠様を偲ぶよすがとさせて頂いたらよろしうございましょうか。」

と問われた時に、法然上人は「遺跡はあの山、この寺と一ヶ所に限つてしまふと、形あるそのものばかりを重く考へ、大切なるべき念佛の教が全國に遍く行きわたることの邪魔になつてしまふ。我が遺跡は一ヶ所に限られたものでなく、日本國中津々浦々に至るまで念佛の聲するところ皆すべて遺跡である。何故かと言うに、念佛を勧めることが我が一代の仕事であり念佛を外にしてこの法然房は無いのであるから、その念佛の聲のするところであるならば、貴賤貧富、金殿陋屋を問はず、海人漁人のいぶせき家でも皆それが我が遺跡である」

と仰せられたのである。

上は所謂三帝の戒師とて、高倉天皇、後白河法皇、後鳥羽上皇を始め多くの皇妃の御授戒の師匠となり、關白九條兼實公始め、三公公卿、武門にあつては源賴朝の後室尼將軍政子を筆頭に數多くの鎌倉の御家人、下は京洛の民衆の歸依渴仰を一身に集められた法然上人であるから、若し山を開き、寺を建てる御意志さえあるならば、如何なる大事業をも成し得る御徳、外護の力を持ち乍ら、四十三才比叡山を降りられた上人は爾來吉水の草庵、賀茂の河原屋、小松殿と菴室同然のところに住せられ、訪ね来る者には淨土の法門を説き念佛の行を勧め、御臨終の前後は慈鎮和尚の御計らいで大谷の禪房に入られ、御一生の間、今日の言葉で言うならば借家生活、間借生活同様の御日暮しに甘んぜられたのは何故であつたらう。

若し一山を開き、結界の道場とするならば折角の易行易修の法門も高嶺の花に終つてしまふのである。高い山に咲く美しき高山植物は平地では見ることが出来ない、それを見ようとするならば高山に登るより外に方法はないのであつて、老幼、婦女子の仲々見ることの出来ないものである。石童丸の物語で有名

な高野山の如く、女人には近寄ることの出来ない佛教とならざるを得ないのである。菴に迷える一切の人々を救わんとする悲願を立てられた上人は、山より街に降りて一般大衆の生活の中にとけ込んでこそ彌陀の本領を弘めることが出来ると言う御信念であり、源平の兵亂に焼落ちし奈良東大寺大佛殿の再建の大勸進にと言う勅命に對し、「自分には念佛弘通の大任務があるから」として拜辭せる事實を以てもうかゞわれる如く、念佛勸進の外は如何なる世間的な營みをもかえりみられなかつたのである。

武門の家に生れ、當時としては忍ぶべからざる不俱戰天の父の仇を討たなかつたのも、比叡に留り天臺の座主となり給えと言う師匠のすゝめを振り捨て、山を降りられたのも、晩年免るべき四國への御流罪をも甘んじて受けられたのも、皆念佛一筋に生きんが爲に外ならなかつたのである。

念佛の教が日に／＼盛んになるのを嫉める舊佛教は、或いは比叡山の僧兵が日吉神社の神木を擔い、或いは南都の僧兵が春日神社の御輿をかついで朝廷に念佛停止の強訴を加えた(後白河法皇が『朕の意の如くならざるものは加茂川の水とすごろくの賽と山法師であ

る』と嘆ぜられた)時も時、弟子の住蓮と安樂とが後鳥羽院の熊野御幸の御留守中に、院の女房を出家せしめたということに端を發して、念佛停止と法然門流への彈壓、住蓮、安樂の死罪と師匠法然上人の四國流罪となつた弟子始め信者の悲歎は非常なものである。五十年隨侍した法蓮房信空等が堪りかねて御老體の遠流御命も危かろう。親しく教も受けられぬ。かつ流罪となつては門弟達の面目もない。又勅命が專修念佛を興行する故にとあるからと、

「しばらく御念佛をお止めになつては如何でございましょう。そして御流罪を免れて頂きたい」と懇願するように申出たところ、上人は斷乎これを斥け、

「流罪と言うことは決して恨みとすべきではない。師弟同じ都に住んでもわしもこの八十近い年では別れる時は近いであらう。たとひ海山千里隔てゝ住んでもお淨土で會う日は決ずやつて来る。加えて京都及び近邊は念佛の教も弘まつたので、邊ひな土地の人々にもこの有難い念佛の教を弘めたいと思ひながら、その時期が來なかつたので思いを果すことが出来なかつた。それが今こうして流罪に會うことによつて四國邊土

の人々に念佛の教を弘めることの出来るのは、これと思えば天子様の厚き御恩である。念佛の教は人が止めようとしても決して止まるものではない」

と仰せられ、更に弟子に念佛の教を説かれるので、西阿と言う弟子が推し止めようとする

と、
上「お前は經文や釋文を見ないのか」

西「經釋の文はその通りでございますが、唯この場合世間に對する機嫌を恐れるからでございます」

上「我たとえ死刑に處せられるともこのことを言わないでおろうか」

と、この上人の至誠にはなみ居る人々皆感涙を流したと言うことである。普通であるならば無實の罪だ、逆境だと悲しむところを却つて悦び感謝し、身命を捧げて念佛に生きられた法然上人であるから、念佛の聲するところが遺跡であり、念佛の聲するところには必ず法然上人が還相したまうのである。

佛教に説く還相とは、死んだ人が再び子供となつて生れて來ることではなく、未來永遠に後の人々に信仰の力を與え、導いてゆくこ

とである。或時には我が子、我が妻、我が夫へと、絶えず見えざる勵ましとなることもある。

岐阜縣養老郡池邊村神野もとさん（當時三五）は昭和十八年七月、夫金一氏を南方の戦線で失い、二人の子を背と腹に抱え日雇の生活に齒を食いしばつて一生懸命子供を育て、居るのであるが、彼女の述懐に

「念佛を稱えると一切の雑念が去り、佛様とも思われ、主人とも思われる不思議な聲に勵まされて生き甲斐を感じます」

「佛様だけが頼りです。この信念さえあれば今子供に食べさせる一杯の御飯がなくともどこからかお與えがあるものです」（東海毎日新聞記事）

とある。神野さんは夫の還相をはつきり得た人でありましょう。

八百年昔御往生なされし法然上人は、苦しみに喘いで居る我々を救わんが爲に念佛の聲の中に還相し、我々の生活の中に生き／＼と生き給うのである。戦後我々日本人の心から良心が失われ、ともすれば良心と言う言葉さえもが忘れかけられているようである。又佛

に恥じ、神を怖れると言う氣持も薄らいでいる。この時にこそこの法然上人の御精神を體し、念佛の中に上人の還相を信じ、常に法然上人と共に生き、共に臥すの自覺を持ち、忘れ勝な良心をも取り戻すべきである。一般世間に於ては、人格の尊嚴を叫ばなければならぬが、念佛の世界に於ては人格の尊嚴を叫ばなくとも稱える中に、それが實踐されてゆくのである。

上人はかく無形の寶を遺物とし、遺跡として遺されたのである。形あるものは必ず滅するの理、火にも焼けず、水にも流されず、永遠に光を放つものこそ念佛である。我々は今一度形あるものにとらわれて尊い精神を忘れてかけていないかを反省せねばならぬ。今私の居る場所が如何にむさくるしき荒屋であろうと、私が念佛さえ稱えるならば、こゝがこのまゝ法然上人の御遺跡となることが出来るのである。この有難さ勿體なさ、これを思うにつけて自ら念佛も勵まされて來るのである。それが或る時には助け給えの念佛となり、或る時には感謝の念佛ともなり、報恩の念佛ともなり、念佛相續の姿となつて來るのである。

白隠禪師と山賊長四郎



藤 田 和 彦

◎箱根の山賊

慶安二年由井正雪の陰謀が、丸橋忠彌等の輕舉によつて事前に發覺する所となり、由井正雪初め其の一味は誅伐せられたのであつた。しかしながら殘黨共は反省する事なく、却て世をねたみはかなんで自暴自棄となり、逆に山賊と化し關東の難關たる箱根山を根據とし、多くの手下と共に往き來の旅人をいじめ苦しめ、あまつさえ參勤交代する大小名の行李金匱にまで掠奪の手を延ばすに至つた。此の事が奉行老中の知る所となつて、之れが征壓につき老中の苦慮することは一方ではなかつた。これ等草賊を征壓せんものと心ある武藝者は率先して其の任に當たり、いづれも局部的な成功を收め手柄話に花を咲かせたが、更らに効果は舉らず被害は増大の一途を辿つた。最後には柳生十兵衛までも此の舉に加わつて、賊徒の頭目あご長を山寨に於いて取押え散々にこらしめた。丁度此の山寨に鑑禁して折檻中の母親と十八九才の娘兩人を救い出しに成功し、再び渺かる惡事を働かぬ旨を頭目に誓約させて下山し、母子を安全地帯に送り出して、上落はしたものの、其の捕伐の最中に所持の印籠を取り落された。之がかつて將軍家から拜領の御墨付の印籠であつたから之れも失敗に終つたのであつた。しかしながらあご長等山賊の暴行は頻發するのみにて止むる所を知らぬ状態であつた。

このような不祥事件の増大する事は、治安上幕府の體面を傷つけるものであるから、之れが根絶の必要に迫られた。

老中に於ても緊急協議の上武力行使による制壓にては鎮撫すること不可能と斷じ、仁愛を施して慰撫鎮壓すべきであると評議一決するに至り、之れが鎮撫方を時の聖者白隠禪師に依頼して來た。

禪師は幼少の頃より禪門に入り研學修養に精進せられ、傑出した、偉人であつた。五十路を越えて、偶々病に冒されて以來心揮一轉し禪の崇高さを生地で行く事を其の處世の要旨として、専ら苦樂を庶民と共にしながら、菩薩行を行つておられたものである。情味が濃く飄きんな聖者であつたから、世人には一介の風來坊として言い知れぬ親近味を持つておられた。その酒脱した逸話が數多く遺されている。著者は其の一片を古人から寢物語りに聞かされたまゝを集録したものである。

禪師は奉行の依頼を享けて、草賊鎮撫の構想を練つた。難事ではあるが極悪人を善導する事は吾等の勤めであると決意し、之の重任を快よく引受けられた。

◎薩 太 峠

慶安三年五月上旬禪師は墨染の衣に頭巾、白の脚伴に旅装を整え随件をも連れず只だ一人、駿河の峻嶮薩太峠に差し向つた。

この薩峠太は西は興津から由比に至る一里あまりの峻嶮で正面は駿河灣の入江に臨み、背後に駿府城を抱擁する要害無双の峠である。この峠は人は二列、馬は一頭が辛じて通れるような、峻峰であるから、道行する者の人數から行李の數までも見透しが付け易く、従つて山賊等の策謀地としては屈強な好條件を整えている。

頂上には見晴臺に一軒の茶店が張られてあつた。

「婆あさん御免よ」

と床机に腰を降した。

「マア和尚さま大層お早くどちらへお旅び立ちで御座居ますか」

「オ、わしはのー一寸江戸まで行かなければならぬ用向きが出來

てのー」

「それはーお件もお連れに成らずに、お一人で御座いますか」と、早速澁茶を差し出だす。

世辭の澁茶を喫しながら海面を眺めて絶景を賞讃せられながらいろいろと話かけられる。

「五月と言うても未だ朝晩は冷いの！ 時に婆さん棚の小樽はありや白雪ではないか」

「マア和尚さまのお目の早いこと、之れは昨日届きました計りで未だ手を付けていないので御座いますよ」

「オウそうか夫れは又格別じや、わしが口開けをして進んぜようかい」

「それはマア有難う御座います」

と、早速かんを付けて持つて出る。

「イヤ白雪は香りと云い、味も良しこりや格別じやわい」と景色に見惚れて遂に二本を傾けられた。

折柄表に威勢の好い若者が這入つて來た。

「婆あさん今日は」

「オヤ親方さん大層お早く。マアどちらへお出に成りますの」

「サア急に用が出來たので今から江戸へ上ろうと思つてな、まず何は兎もあれ温い所を一本頼むよ」

「ハイハイ畏りました」

と早速熱かん一本を持つて出る。

「ホッホッホホりや堪らぬわい」

と舌鼓を打ちながらジロリと和尚の様子を窺い、禪師の前にもみ手をしながらそそり出で。

「和尚さま、今日は結構なお天氣で御座います。和尚さまは仲々御元氣にお見受け申しますが、してどちらまで御旅立ちで御座いますか」

「オ、わしかの、一寸用向きが出来たので江戸まで上ろうと思ふんじやが」

「それは又大變な御元氣ですな。お件も連れず只お一人て御座いますか。時にわつちも江戸まで上る者で御座いやすが、御差支がなければどうぞお伴をさせて載きとう存じますが」

と、いんぎんに挨拶をして來た。

「それは親切なお言葉じやが、俺しの様な者は足が遅いから迷惑であらうかの」

「イエイエ迷惑どころでは御座いやせん、和尚さまの御伴をさせて戴けますれば、渺んな有難い事は御座エやせん」

「オ、ソウカイ」と沈思の面持ちであつたが打ち領き、

「お前さえ良ければ、俺しの方は誠に仕合せな事じやぞえ」
こうして隨伴の約束が成立した。

「ア、有難い、こんな嬉しい事は御座エやせん、まあ約束の驗に一献汲みましよう」

と、自雪一本を呈してお伴の誓をした。

禪師も良い氣持ちで、既に白雪三本を傾けられた。

若者——實は山賊あご長——は此の坊主仲々話せるな。ただの坊主じやなかうと思つたらしい。

「大分良い氣持ちに成つたわい、そろそろ出立しようではないか」
ハイ畏りましと密に北叟笑えむ。彼の坊主が所持の小判貳百兩は

今日の暮れ方迄に俺れのドンブリの内に宿替えかと、ハタと膝を叩

いて微笑を漏らす。

禪師の方は何んだか顔に銀蠅でもとまつたとても云う振りで、さあらぬていで、わらしを結び直しておられる。

茶店のお態は此の有様を見守り、ただならぬ氣配を察知してか、不安さうに立ちすくんでいる。

禪師は旅人を供に伴れ、ほろ酔い氣嫌で歩みを運んだが、不圖立ち止つて、

「お前を伴につれたのはよいが、名前が無いと都合が悪いがお前の名は何んと云うぞえ」

と、問はれて其男、

「エ、わつちは長太郎と申しやす。」

「ウンそうか、お前は太分セイが高くキリンの様にアゴが長いによつて、それで長太郎か仲々釣り合の取れた、良い名じやのう」

戯ながら半道計り歩を運んで行く途中、遙かの山の中腹に一と際目出つた老楓が望まれて來た。

「見よ彼の楓はな、大盆と云ふて、此の土地特有の紅葉じやわい。昔日本武尊命が東夷征代の折、海路風浪に遭うて難船せられた際に、此の楓を目標として船を此の木の下に漕ぎ付け難を避けられた楓じや。よつて橘姫の楓と名付けている。幾百年の歳月を雨露に叩かれても、良く成育して道往く人々を樂しませて呉れる銘樹じや。」

此の時であつた和尚が風景に見惚れている隙を窺つて、彼の若者腰の邊りを強打して崖下に墜落せしめんと、氣合をかけて詰め寄つた。

間一髪禪師の持つた錫杖が脇の下からスツと突き出されて長太郎

の顔面を軽く突いた。

サツと一と足飛びすぎり一寸あわてたが、さあらぬ體に裝つて

「エヘ、、、和尚さまが餘り絶景をお譽なさるので、わつち迄が釣り込まれてつい景色に見惚れてゐる裡に、石につまづいてお杖に當り、飛んだ粗忽を致しました」と、白を切つて詫をいう。

「オ、そうであつたが、兎角年を取ると足元が悪くなつての、飛んだ粗忽をしたわい」と。平氣で謝辭を述べられる。

◎淨瑠璃寺

なおも兩人歩みを續け薩太峠の麓を降だる途中に一つの古寺があつた。が随分荒れ果てている。

禪師は北の古寺の式台に上つて讀經をせられた。

「お尙さま此の古寺は何んと云ふ寺でげすかえ」

「オ、此の寺か、これは、昔源九郎判官義經が、比叡山の譽明禪師の許で稚兒として十五才まで禪の修行を専らとして育てられる内に生來非凡の性格であつたから武術も習はれたが、幼少にして武術の極意を體得せられ卓越した武藝の持主と成つていた。此事が平家方の知る所となつて、惧れをなし、彼れ等は、庶那王を若葉の裡に討ち取らうとして、比叡山の譽明禪師に庶那王追放を申込んで來た。譽明禪師に於いても之れ以上庶那王を庇護する事は本山の不利なることを慮り、遂に庶那王を奥羽の藤原氏に寄偶せしめる事に決意したのだ。従者及び手廻り行李を整えて、奥羽へ旅立たせる途中美濃の名主（舊は源氏滴流の公家）の館に二三泊せられた。其の際

庶那王は獨自で（源氏由緒の神前）元服し、源九郎義經と命名せられたのじや。此の一行の旅立ちを山賊熊坂長範が臭ぎつけ、或る夜手勢百數十人を引き連れ、此の館に夜襲をして來たのじや。館は大混亂に陥つた。息女淨瑠璃姫は賊徒の手に捉えられ、既に逃げ去られようという危急の所を、十五才の義經の武勇によつて、山賊共は散々に討ち立てられ、一物を得ずに逃げ去り、姫を賊徒の手から取戻して事なくすんだのだよ。ところがその義經の恩義と武勇に、ほだされ娘心に忘れ難く、遂に命まで捧げんものと情熱の戀に墜つたのだ。義經は西海に平家滅亡戰を展開していたから拾年間は多事多端であり、戦い終つて一先づ都へ凱旋はしたものの、兄頼朝の勘氣に觸れて煩悶の裡に五年の歳月を送り、萬策盡きて奥羽衣川にて辨慶諸共自害せられた。其の悲報を聞くと姫は悲しみに堪えず、遂に此の地で詢死してしもうたのだよ。村人等は其の純情に深く同情して、此の地に一字を建立し、永遠の瞑福を祈つてやつたのが、悲哀のこの淨瑠璃寺じや」

彼は禪師の哀な物語りをシミジミ聞かされている裡に殺意も衰えてうなだれていた。

和尚は此の物語りが終ると、急に眠む氣が催したので、其まま其式台へ横になつて轉寢をはじめたかと思うと、まもなく、寢入つてしまわれた。

長太郎は和尚の傍若無人の轉寢の様子を呆れて窺つていたが、之れでは果しがつかぬ、俺れの目的はこの和尚の小判を奪うことだ、つまらぬ氣兼ねは盗人にや持あわさぬと、寢息を窺つて秘に目釘に濕りをくれ、ただ一と打ちとにじり寄つた。（つづく）

謹		賀		新		年	
增上寺 大正大學長 椎尾井匡		鎌倉市材木座 本山 光明寺		小石川 傳通院 傳通院日曜教團 傳通佛青サンガアソカ		芝學園理事長 芝高等學校校長 芝中學校校長 中島眞孝	
宗會議員 戸川靈俊		宗會議員 近江隆善		宗會議員 丸地辨信 橫濱市戸塚區和泉町寶心寺		宮城・石巻・西光寺 宗議・増上寺布教師 樋口隆昇	
宗會議員 昆野秀賢 岩手縣大迫町到岸寺、電四、〇〇三番		法然上人傳 全集刊行會 井川定慶 大阪府高石町、惠稱寺		宗會議員 村上愍瑞 長野縣茅野町功德寺		有限會社 山喜房佛書林 本郷赤門前・電(92)五三六一番	
野村桂造法衣店 東京都港區愛宕トネル際		宗會議員 杉田義俊 神奈川教區長 新春を祝し日頃の 御支援を感謝す		淨土宗保育連盟理事 共生保育園長 古屋道雄		宗會議員 村上愍瑞 長野縣茅野町功德寺	
佐藤賢順		佐藤密雄		中村康隆		良忠寺 橫濱市矢向町	
佐藤良智		法然上人鑽仰會 (敬稱略・到着順)		良忠寺 橫濱市矢向町		法然上人鑽仰會	

施本に

浄土トラクト

B6版
十六頁

竹中信常著

正信へのみちびき

現下新興宗教の功罪を論じ
そのヒロボンの病根を鋭く批
判すると共に、正しい信仰の
あり方を適切に指導する。

藤井實應著

一枚起請文

法然上人の全信仰の結晶た
る一枚起請文をば、懇切に解
説せられてある。

法然上人鑽仰會編

信徒必携

信者として之だけは心得お
くべきことがらが、教義から
行事作法に到るまで明示され
ている。

定價一部十圓、○十部以上八
圓、送料十部毎八圓増○五
十部以上七圓、送料五十圓
○百部以上送料當方負擔

芝園だより

○明けましておめでとうございま
す。國內も新しい政局の上に、今
までの内外の蓋いかぶされていた
ものが取除かれるようなかすかな
希望が感ぜられますし、海外も、
鐵と竹のカーテンの隙間から、感
情の交流が音をたて、流れ出しま
した。特に全中國との長い途絶は
悲しい事でした。本年を機とし
て、再び友好に轉ずる事を望みま
す。

○その意味で、本年初頭をば、最
近中國に赴かれた大谷・戒能兩氏
の對談で飾りました。

○又、法然上人の御忌（御命日）
は本年二十五日のところ、法要と
しては季節の關係上、ふつう四月
に行われております。本誌は、今
月、御影と、大橋・新保・須藤各
氏の御執筆とで、上人の御入滅を
偲びました。

○最近、本誌に對する愛情の現わ
れともみるべき會員各位の御高評

が増えて参り、編輯部では感激し
て一句片言たりとも、じつくり讀
ませてもらつています。嚴しい苦
言、賞詞交々で、次號へは少し御
紹介します。

○本欄への批評も、私情は眞平だ
と意見が強く、本年度より、やゝ
行方を變えていくつもりです。

○浄土宗報へ予告した鈴木大拙先
生のは、都合により二月號か
ら五回に渡つて連載致します。外
國人で佛教といえは鈴木先生の著
を通して知るものが大半であるほ
どの先生の御話は感銘深いものが
あります。「白隠禪師」も、後二回
連続します。

○本誌を篤信の方への施本とし
て、委託施本なさる方が多くなり
ましたが、正月號は又、よい機會
ですから、之から御利用下さい。
○本年も表紙は松濤遠文畫伯を御
頼みしました。昨年は御寺の
落成と、御結婚とで、御多忙でし
たが、又、春の作品出品でお忙し
い由。

誌代（会費）

半ヶ年二〇〇圓、一年四〇〇
圓、（送料共）、但し、御篤
志の維持會員の方は千圓で
す。一部は三十圓、送料四圓。
前金でお願いしております。
前金切次第、精算通知を差上
げますから、折返し御送金下
さい。送金は確實便利な振替
を御利用願います。
繼續、新規講讀、維持會員、
委託施本の別を明記下さると
共に、新しい都市は縣名を附
して下さい。

「浄土」 一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和廿九年十二月廿五日印刷
昭和三十年一月一日發行

（定價三十圓）

編輯兼
發行人 眞野 正 順

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都千代田區神田保町三ノ十
東京都港區美空園五ノ一〇
電話・芝（四三）一三二八

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

團體宿泊御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東區深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 乘
電話深川(64)五八四八

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
ツトで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松管
・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

鐵ブランコ2人乗	¥ 12,000
鐵ブランコ3人乗	¥ 14,000
鐵ブランコ4人乗	¥ 22,000
鐵ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付